

特集Ⅱ今、注目の日本人指揮者は誰か？！

今、もつとも注目している指揮者たち

## 今、注目の12人の指揮者

家族愛に燃える

飯守、小林の両巨頭



内藤彰

浅岡弘和

先日贈賞式が行なわれた第十回齋藤秀雄メモリアル基金賞は指揮部門受賞者が高関健、チェロ部門受賞者が鈴木秀美であった。鈴木といえどももちろん古楽奏法を実践する名チェリストだが、数年前にはオーケストラ・ニッポニカでドヴォルザークの8番をピリオド風に振ったことがあり、なかなかの名演だった覚えがある。今度またニッポニカを振ると聞いたが、次は指揮者部門でも受賞し2部門制覇と行くか。

鈴木の実兄の鈴木雅明も、現在シテイフィルでマーラーに取り組んでいるが、シテイ初登場は「モーツァルトへの道」と題した古典派交響曲の頂点「ジュピター」をメインとする回で、

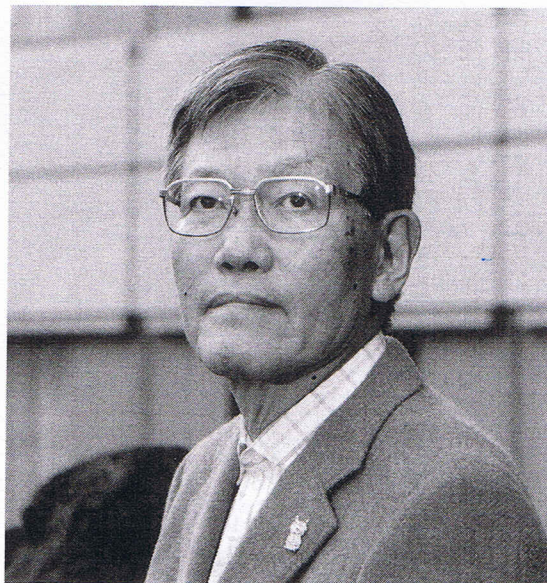
アーノンクールなどよりずっと素晴らしいモーツァルトだった記憶がある。さらに雅明の長男である鈴木優人はヴァイオリンの山口幸恵とアンサンブルジュエネシスを結成、オリジナル楽器によりバロックから現代物まで意欲的なプログラムを展開。先頃K A A T神奈川芸術劇場で行なわれた「エウリディーチェの嘆き」はオウイデイウスの『変身物語』を題材にバロック曲と現代曲そして現代舞踊とのコラボによる「小オペラ」総合芸術だった。高関健は群響音楽監督勇退後、自由な活動を続けているが、かつてシテイでブルックナーの8番を振った時は同時期の尾高／N響の同曲を上回っていた記憶があり、

相当な実力者といえる。だが高関といえば新校訂楽譜であろう。CD BOX化された浜離宮に於ける群響のベートーヴェン全集（1995）。当時「第九」はベーレンライター新版（1997）が未出版でありこれは高関自身が自筆譜を参照して校訂したもの。そして翌1996年、

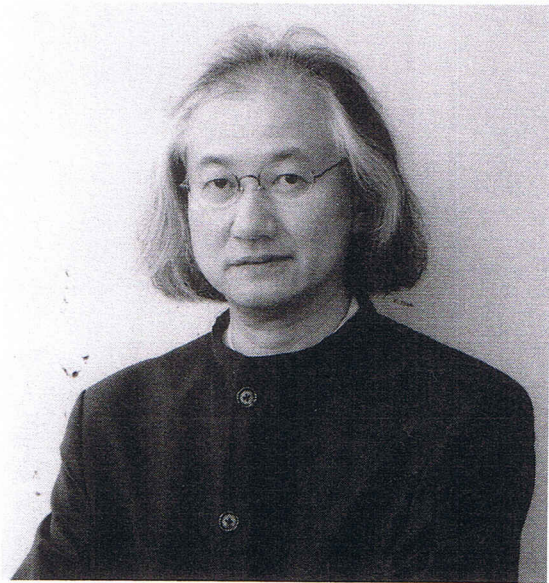
新日本フィルでベーレンライター版日本初演。2002年には大阪センチュリー響でベーレンライター新版録音と続く。これを見ると東京ニューシティ管音楽監督内藤彰のベートーヴェン新版使用は完全に後塵を拝しているわけだが、2006年のモーツァルトイヤーに東京ニューシティで行なわれた「ポストホルン」4楽章版交響曲化計画（新交響曲第37番）はウイキペディアにもノリントンと共に記載されており、  
<http://ja.wikipedia.org/wiki/セレナーデ第9番>  
 （モーツァルト）、<http://ja.wikipedia.org/wiki/交響曲第37番>（モーツァルト）、ことによると内藤ピリオドの唯一の成果かも。（この演奏会は珍しくニール・ザスラウによるモーツァルト交響曲観の見直し、とピリオド奏法の両方を兼ね備えたものであった）。

大震災直前の宇宿允人の死により、宇宿、宇野功芳、根本昌明の三大カリスマ指揮者の一角が崩れてしまったが、最年長の宇野はまだまだ元気で傘寿記念に敬老の日、ベートーヴェン「第7」を演奏。宇野のベト7はこれが最後とのことだったが81歳の老人力が炸裂！ファンも

ファンでない者も感動してしまうほどの大熱演だった。この演奏、何とスケルトンを3部形式に省略しての演奏だったが、フィナーレを完全



宇野功芳



矢崎彦太郎

にアタッカで続けたためもあり、ちょうど「運命」と同じ構造になっていた。そしてその宇野がただ一人自分を上回る指揮者だと評した根本昌明の「第九」はCDやDVDにもなっていないが、未だかつて聴いたことのないような途轍もない「第九」だった。フィナーレなど普通なら止まってしまふような場面が続出。よく踏みとどまったと思うが、崩壊しそうでしない。下半身にもう一つ命があるように土俵際で踏みとどまれる驚異の粘り腰。特に後半は新機軸満載で二重フーガの最終段で大きくテンポを落とすなど巨匠級の指揮者でなければ決してできない決りに決った表現が目白押し！ 729小節と730小節の間にパウゼを入れたのはリハの時もやっており、そういう解釈なのである。

飯守泰次郎といえばコバケンと並ぶポストオザワの日本指揮界の最長老。日本、いや世界でも有数のワーグナー指揮者である。その飯守が奥方のヴァイオリニスト？ 橋比佐子と時折アットホームなコンサートを開いている。先日もドヴォルザークやクライスラーで聴衆を魅了。そして何と若き飯守の秀作「ロマンス」(ピアノソロ)まで披露されたが、高橋も初めて聴く曲らしく、演奏後、次のような会話があった。

妻：私の知らないロマンス  
夫：若気の至り

若い妻がややなじるように言うと、酸いも甘いも噛み分けた初老の夫が絶妙の返しを見せる

シチュエーション？ 当意即妙の会話に場内は大爆笑。筆者もさすがオペラの第一人者ならではのセンスと深く感じ入った次第。そしてティアラこうとうでピティナ特級グランプリ梅村知世と共演したチャイコフスキーチクルスも素晴しかった。もう一方の雄、読響特別客演指揮者&日本フィル桂冠指揮者小林研一郎も愛娘亜矢乃との共演に忙しく、両巨頭はただ今、家族愛に燃えている模様。

先頃「指揮者かたぎ」を上梓した文人指揮者矢崎彦太郎も現在円熟の時を迎えている。定期のフランクも良かったがティアラの「未完成」は滅多に聴けぬ超名演だった。矢崎曰く「未完成」という名の完成された交響曲だと思っている。

チェコ・ヴィルトゥオージ室内管首席客演指揮者のコンポーザーコンダクター平井秀明は先日東京で久しぶりに自作オペラ「かぐや姫」を振ったが、ザルツブルクでも上演されるという。もう一つのオペラ「小町百年の恋」と共にブレイクするか。そして下野竜也が相変わらずの活躍ぶり。読響正指揮者は元々彼のために新設されたポストだったが、下野の大成功により彼以降の読響正指揮者はクラシック音楽界の「皇太子ポジジョン」と看做されるに違いない。上岡敏之、阪哲朗、山田和樹、川瀬賢太郎、三橋敬子、海老原光についても触れたいが最早紙数も尽きた。